



# 森の生活で、健康と環境に優しい持続可能なライフスタイル

## NPO法人森の生活

下川町は北海道の北部、名寄市の東隣に位置する、総面積の約90%が森林の緑豊かなまちです。

この豊かな森林資源を生かし、山村に軸足を置いた経済活動を通じて森と人とのつながりを回復させ、森の生活の舞台となる山村社会と自然環境を持続可能な形で次世代に引き継ぐと、NPO法人「森の生活」が2005年11月に設立され、活動を続けています。

奈須憲一郎代表に、立ち上げの経緯、活動内容、今後の展開などについてうかがいました。



## 内発的発展を目指す下川町の取り組み

下川町は、国有林からの森林購入により町有林を拡大してきた森のまちです。

森林組合が中心となって、森林を基盤とした循環型の林業経営と、その過程で生じる間伐材等の木質資源をカラマツ木炭生産などにゼロエミッション（廃棄物なし）で活用することなどに長年取り組んできたことが実って、今日のまちがあり

ます。

例えば、アイスクャンドルや万里長城などのさまざまなまちおこし活動、下川産業クラスター研究会（1998年4月）や、森林を核とした産業クラスターを政策的に促進する（助）下川町ふるさと開発振興公社クラスター推進部（2002年4月）、道内外の有識者と交流を図る地域学「しもかわ学会」（2003年10月）の発足などの取り組みは、内発的発展<sup>\*</sup>の典型例としての下川町の評価を確固たるものにしてきました。

## NPO法人「森の生活」の発足

1997年の9月、後にNPO法人「森の生活」の母体となる「さーくる森人類」が発足しました。下川町森林組合へIターン、Uターンした人々をはじめとする移住者の多いサークルです。以来、森づくりや森林・林業体験事業などを幅広く実践してきたといいます。2001年には活動の拠点となった町有林「下川町五味温泉体験の森」36haの管理運営について下川町とパートナーシップ協定を締結、町民や都市住民の参加を得ながら活動。同年には北海道知事から「緑化貢献」の感謝状、2002年には「わが村を美しくー北海道」運動の交流部門銅賞受賞など、森林交流のパイオニアとしての評価を得ます。



森林の空間を利用した森林浴

<sup>\*</sup> 内発的発展：地域内の資源（自然、景観、文化、歴史、人材など）により地域の発展を図る考え方。

「しかし、メンバーは仕事をしながら片手間での活動です。日々高まる評価と期待に、このままのスタイルでは応えられないという結論に達しました。また、移住者が毎年加わる一方で、下川町を去る仲間も数多く、彼らが去らざるを得なかった理由の一つには自分の思い描くような職がないことがありました。この2つの問題点を解決するためには、私たちが培ってきた森林交流事業を経済活動として発展させ、その活動の中で参加する一人ひとりが自らの思い描く職を開拓していくことが一番だと考えたのです」

たまたま、2002年から下川産業クラスター研究会が「自然療法プロジェクト」として研究してきた、森林療法をはじめとする自然療法が、健康と癒しを求める時代の流れと合致し、事業としての可能性を示し始めたことから、2005年6月、奈須代表の呼びかけで「しもかわ森林療法協議会」が発足しました。

この「自然療法プロジェクト」で研究してきた健康と癒しの事業を柱のひとつとして、健康で持続可能なライフスタイルの創造と提案を行う非営利の経済活動の主体として、2005年8月、「さーくる森人類」を発展的に解消し、NPO法人「森の生活」が設立されました。

奈須代表はいいます。

「現代社会では森に象徴される自然と切り離された生活が進み、その結果、地球は温暖化という形でメッセージを発信しています。人が人らしく健康的に暮らすには、森を歩き、野草や果実を摘み、狩りをし、食べ、寝る。そうして人類は暮らしてきました。現代人に“森の生活”を取り戻すことが、人間や地球の健康にとって一番の解決法です。しかし、山村は崩壊の危機を迎え、山村が受け継いできた“森の生活”を営む知恵も失われようとしています。私たちの目的は、森の生活を取り戻すために、山村に軸足を置いた経済活動を通じて森と人とのつながりを回復させ、その舞台となる山村社会と自然環境を持続可能な形で次の世代へ引き継ごうということです。こうした協働のコミュニティが群発し、世界規模の“森の生活”ネットワークを形成するとき、地球にとっても人



自然資源を活かした間伐体験

間にとっても健康で持続可能な社会が訪れることでしょう。まずは都市で生活する人々に心身を癒す場、環境を学ぶ場を提供していくところから、小さな一歩を踏み出したのです」

#### 林業体験から人材育成まで幅広く

NPO法人「森の生活」の設立目的は定款に「下川町の資源である森を活用した多様な活動を通じて、参加する人々の健康的で心豊かな生活の創造、環境教育の促進を図り、農山村地域の活性化、地球環境に寄与すること」と定められています。そして、この目的を達成するために7つの事業を行うとしています。

1つ目は、「森のコンシェルジュ事業」。森林・林業やまちづくり関係の視察・体験・保養にかかる情報の提供・相談窓口・コーディネート。森や自然に関する相談を受ける、いわば総合インフォメーション機能。

「将来的には、会員限定で日本中や世界中の森林情報を集めて“世界中の森”の情報を発信したい」と奈須代表。

2つ目は、「森のツーリズム事業」。自然資源・人材を活かした各種視察・体験のガイド。森のアロマツアー（もみの木精油の蒸留体験）、森の休日（白樺の樹液採取、山菜採取）。

3つ目は、「森のセラピー事業」。森林の空間や産物を活用した「森林養生プログラム（医療機関との連携による森林治療）」やしもかわ森林治療協議会での各種事業など。

4つ目は、「森のスローフード事業」。安全、安心、健康な食べ物の普及啓発を目的とした生産・加工・販売。うどん祭り出店、地元の主婦によるスローフードバイキングなど。

「森林観光産業化、林業体験型から森林治療を行う滞在型になると必ず食事がセットになりますから、それをスローフードで行いたい。将来は自分たちで提供することも考えていますが、現在は地元とタイアップして食事を提供してもらっています。地元の人たちともコンセプトを共有しています」

5つ目は「森のセレクトショップ事業」。健康や環境に配慮した商品の普及啓発を目的とした開発、製造、販売。アロマテラピー用エッセンシャルオイル、ハーブティー、トマトジュース、手延べ麺の販売を行い、事業的には大きな柱となっています。これは「健康と環境に良い物を選んで販売し、その商品が広がることによって社会貢献になる」という位置づけで、エッセンシャルオイルについては、森林組合がかつて行っていたものを、正式に契約して製造部門も引き継いで販売の一連事業として行っています。

6つ目は「森の手仕事事業」。多様な主体の協働による森づくり、道づくり。下川町で行われた大学のゼミ合宿における体験の森での間伐やフットバスづくり体験。

7つ目は「森の大学事業」。事業を発展させるための調査・研究、普及・啓発、人材育成。各種セミナー、シンポジウム等の講師、パネラー、中高生に自主学習の場を提供する寺子屋など。

「森の生活」では、林業体験から人材育成まで幅広く多様な事業に取り組んでいます。

### 三位一体のソフト事業を

「小さくていい。小さいけれどもそこに未来が見えるみたいなものをつくって、そこにいろんな人が来て、そのノウハウを各地に持ち帰って実践



トドマツの精油や蒸留水を利用した商品「HOKKAIDOもみの木」シリーズ

する。それが下川産業クラスター研究会の目指した森林ミュージアム（下川町全体を森林・林業の生きた博物館とする発想）です。環境的にも健康的にも持続可能で豊かな暮らしが地域内でうまく循環して、うまくバランスがとれればいい。昨年まで下川町森林組合が取り組んできた樹木成分加工販売を、今年4月から私たちが段階的に引き継ぎ、第3次産業から第2次産業へと森の生活組織内の産業クラスター形成も進みます。これまで業態としても観光業的な宿泊と体験とおみやげという三位一体でやってきましたが、特にこれからは山村地域の地域振興みたいな中で、ソフト事業を観光と一緒にやっていくモデルになればと考えています」と奈須代表。

\*

NPO法人「森の生活」のような事業型NPOは、収益活動を重視するNPOとして、社会的商品やサービスを有償で提供し、社会的課題の解決を使命に事業に取り組む、新しい事業体「ソーシャル・エンタープライズ（社会的企業）」の一形態として今後の発展が大いに注目されています。組織体としての永続的な活動には、人の力と資金面での手当てが欠かせません。それらをうまく調和させるあり方がここにはあります。

NPO森の生活HP

<http://forestlife.dreamblog.jp>